Refrain ～愛しい貴女と過ごす時を央見て～

天羽　爽夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｆｒａｉｎ　～愛しい貴女と過ごす時を夢見て～

【Ｎコード】
Ｎ８６９５Ｋ

【作者名】
天羽　爽夏

【あらすじ】
ある男の狂気と愛情の物語……のようなもの。

初投稿です。どんな感じに投稿されるのか知りたくて、昔書いた作品を載せてみました。
あまり深く突っ込まないでくれると嬉しいです。

（前書き）

分類をホラーにしてみたけど、ホラーかは微妙です。
あまり期待しないでください。

コポコポコポ……
――水の音が部屋の中に響き渡る。
コポコポコポ……
――静か過ぎる部屋の中に響く。
コポコポコポ……コポ……
――暗い暗い、部屋の中に響いていた。

その部屋の中に置かれた、水槽のようなモノ。縦長の巨大なソレに満たされた水は、タプンと揺れた。
下から沸き起こる泡たちは、ゆらゆらと上へと昇っていった――
――縦置きにされたソレは、部屋の天井まで届いていて……ゆらりと中にある水草が揺れる。
ユラリユラリと、揺れるそれを……青年は、ただ、ぼんやりと眺める。

「ヴィレット――――」

部屋の中央、その水槽が良く見えるその位置に設えたソファー。
そのソファーに座る彼は目を細め、ぽつりと呟いた。
一拍置いて、青年の呟きに答えるかのように部屋の扉が開かれる――――現れたのは一人の女。
「ラフェス……呼んだか？」
柔らかな声が、ぶっきらぼうに言葉をつむぐ――――青年は、彼女

の姿を視界に認めると、にこっと微笑む。
その唇が紡ぐ声は、甘露のように魅惑的で……その唇から発せられる言葉は、心の奥の欲望に火を灯す。
「えぇ、貴女の気配を感じましてね」
ラフェスは微笑みながらそう呟くと、すっと立ちあがると、ヴィレットを部屋の中に招くように、内側に扉を開く。
「グラス、あったよな？」
手に持った緑色の細長い瓶をちょっと持ち上げて、彼女は、にっと笑った――その瓶の中を満たす液体は、葡萄を醗酵させたお酒。そのお酒の色は、血の色よりも紅くて、それを持つ女の瞳の色のように深紅で美しい。
「えぇ……」
微笑を浮かべ答える青年に、彼女は瓶に目線を合わせて満足げに笑う。
そして、すたすたと部屋の中へと歩を進め、ぽふっとソファーに腰を下ろした。少し腕を伸ばして、ソファーの前にあるローテーブルに、緑色の瓶を置く。
「葡萄酒、ですか？」
ラフェスは、自分のわきを通り過ぎたヴィレットに向って呟く。
その後に、「お酒の飲み過ぎは良くないですよ」と呆れたように付け加えたのは、彼女の身体を心配した為か――からかっただけなのか。
「るせぇな……」
拗ねたように呟くヴィレット。
ラフェスは、その様子にクスッと微笑むだけで、それを咎める事しないらしく、それ以上何も言わなかった。
彼は、扉を閉めるとそのまま、入口近くにある棚からグラスを二つ取りだした。並んだグラスの中、淡く緑色に光るワイングラスを選び出す。優美な指がほっそりとしたグラスの足をつまむ。
ついでに、引出しの中からコルク抜きを取ると、ソファーに移動

する。
ローテーブルの上にグラスを置くと、緑色の瓶を手に取る。慣れた風にその封を解き、部屋の中にポムッと乾いた音が響いた。
瓶の中からほのかに漂う芳香――――鼻腔をくすぐる薫りに、ラフェスは目を細めた。
「イイ薫りだろう？」
青年のその様子に、ニヤリと唇を歪ませるヴィレット――――その言葉の響きに一抹の不安を覚えながらも、トクトクとグラスに紅い液体を注ぎ込む。注ぎながら……ある出来事が頭の中に浮かびあがった。
外気に触れた液体たちは、その身から薫らせる芳香を余すことなく部屋中に広がらせる。甘い薫りが二人の鼻腔を楽しませる。
二つ並んだグラス――――それらは、微かな部屋の光を受けてテーブルの上に影を落とす。何も入っていない透き通った薄緑のグラスは、影の中に淡い緑を滑り込ませる。片方の紅く色づいたグラスは、微かな光を内包し……影の一部を紅く染め上げた。
その並んだ色が、自分たちの瞳の色を彷彿させて――――ヴィレットは、口元に笑みを浮かべると、それにゆっくりと手を伸ばした。
「ダメですよ」
グラスに指が触れるか触れないかといった微妙な位置で、伸ばされた手はパシリと叩かれる。
ビックリして一瞬動きが止まり、グラスに向けていた視線が、己の手を叩いた手に移り……そのまま、ラフェスの顔に移る。
その顔に張り付けられた微笑み――――光の加減でだろうか……暖かなもののはずのソレは、酷薄としたものに見える。
にこにこと微笑を浮かべたその姿に、何やら薄ら寒いものを覚えて固まってしまったのは――――何も己のせいでは無いはずだ。
「ヴィレット？　知ってます？」
「……な、にを？」
少しびくついた声。伸ばしている腕は、凍り付いたように動かな

かった。
ラフェスはクスリと笑って、グラスを持つ。持ったグラスを瞳より心持ち上に掲げる。
ユラリと揺れた紅い液体に目を細め……顔をそのままに、視線だけがヴィレットの方に移動する。その視線にビクリと怯えるヴィレット。
「さっき、回廊でキュレーと会ったんですよね」
にこにこにこ――その微笑みに居心地が悪くなる。
「――キュレーが？　なに？」
顔が引きつっている――自分でも分かるくらいに、ひくひくと痙攣している顔の筋肉。

――自分は、ちゃんと笑顔が作れているのだろうか？

ラフェスは、微笑みを浮かべたまま、グラスを持つ腕を動かす。
口元に当てたグラス。ふわりと包み込むような薫りを楽しみつつ、グラスを傾け――一口含む。まろやかな薫りが口の中に広がった。
「イイお酒ですね」
「あ……あぁ……だ、だろう？」
「――流石、キュレーの『とっておき』だけありますよねぇ」
「……知ってたのか？」
さらりと呟かれる言葉に、ばつの悪い顔をするヴィレット。がっくりと肩を落とすヴィレットを見て、ラフェスの顔に笑みが広がる。
「キュレー、かなりの御立腹でしたよ？」
くすくすと笑いながら、グラスを口元に近づけ、また一口飲む。コクリと喉が上下する。
それをうらやましそうに見ていたヴィレットは、そぉっと瓶に手を伸ばしたが、すっと瓶が遠ざかった。腕を伸ばした姿勢のまま、ラフェスの顔を仰ぎ見ると、その顔には微笑が浮かんでいて……背筋をツーッと汗が流れ落ちる。

「ダメって、言ったでしょう？」
分からない子ですねとでも言いたげな微笑。
「――なぁ……それ、持ってきたのは、私だよな？」
「えぇ。そうですよ――――当然でしょう？　僕が、キュレーの所から盗み出すなんて……そんな泥棒みたいな真似、出来るわけが無いじゃないですか」
何をわかりきった事をとばかりに答えるラフェス。
「じゃぁさ……ナンで、私が飲めないんだ？」
そんなのおかしいんじゃないのかと言外に呟くヴィレットに、くすっと笑ったラフェスは、「当たり前じゃないですか」と笑う。
「日頃、まったく役に立たない上司の代わりに、上役たちからお小言をもらうのは、僕なんですから……」
告げるラフェスのセリフに、ヴィレットは思う。
（そのお小言以上に、私に嫌味の連発するのは、どこにいる副官だろうか？　あれは、絶対、オマエの鬱憤晴らしだろう？）
「それに……頼りない上司の代わりに、部下たちを教育するのも、僕なんですよねぇ」
（おかげで、私の部下だった者たちは、誰かの恐ろしさが身に染みて、オマエに絶対服従状態じゃないだろうか……私の部下って言うより、オマエの部下だろう。アレ――――）
「――――そんな……苦労ばかりしている僕が、このくらい得したって……」
（いつも割を食うのは、私じゃないのか……）
「イイと思いませんか？　ねぇ？　ヴィレット」
にこにこと微笑まれて、言いたくても言えないセリフ――――喉まで来た言葉をごくっと飲み込むヴィレット。自分が、あまりにも哀れで涙が出てくる。
ヴィレットの様子に、クスリと笑うラフェス――――ぷぃっと視線をそらして拗ねるヴィレットに、苦笑しつつ尋ねた。
「そんなに欲しいんですか？」

「あたりまえだろ……」
嫌な予感を抱きつつも、頷くヴィレット。
「仕方がありませんね――――　一口だけですよ」
そう言うと、グラスに残った葡萄酒を全て口に含むと、ヴィレットの腕を掴み引っ張る。バランスを崩したヴィレットが己の胸の中に倒れこむと同時に、グラスを掴んでいた指の力を緩め……落ちていくグラス。
抗議の声を上げようと上向いたヴィレットの顔。その顎をクイッと掴むと、互いの唇を合わせた。
「――――っ！」
驚きのあまり目を開くヴィレット。ゆっくりと口の中に、苦い液体が流れ込む。ゴクッとそれを嚥下するヴィレットの口の中に、ラフェスの舌が忍び込んだ。
ヴィレットの中に侵入したそれは、歯をなぞり、口の中を舐め尽くす。
そして、絡まる舌と舌――――飲み込まれず溢れ出した赤い液体が、唇の端から零れ落ち、ソファーに鮮やかな色を描き出す。
「っん……」
ヤメロと言おうと首を振るが、執拗な舌の動きに翻弄されてしまう――――言葉を発する前に絡め取られた舌。逃げる様に動かすと、追いかけて絡められ……その繰り返し。
歯をなぞる様に動かされた舌。その動きにゾクリとする。
「んっ……」
ヴィレットの腕を掴んでいたラフェスの冷たい手は、力を緩められ、そのまま、すぅっと腕をなぞる。凍えた様に冷えた指先に、皮膚をなぞられ……あまりの冷たさにビクリと身体が震える　――――そう、それは寒さに震えた、ハズ。
「っめ……ろ……」
唇が開放されると酸素不足の身体は、空気を求めて呼吸を繰り返す。言いたい言葉は、荒い息の間に隠された。

クスクスと笑うラフェス。
確実に衣服を剥いでいく形良い指が、露になった肌をなぞる――
――ゆっくりと動かされるその感触が、ヴィレットの体温を上げる。
「ヤメロ――――」
ずりっと後ろに下がりつつ呟く……ヴィレットの言葉を耳にしていないのか、聞えていないのか。ラフェスは、その指の動きを止めようとはしなかった。
女性にしては、筋肉質の張りのある褐色の肌。微かに汗ばむ肌は、熱く火照り――――冷たい指が、その肌を滑るように動く。
「何故？」
クスリと笑う――――やっと手に入れた貴女……僕が手放すはずは無いのに。
「……いだから――――」
「――――？」
首を傾げる僕。

ねぇ、この指に伝わる振動は、ナニ？
震えだす身体――――そんな貴女は、知らない。
ねぇ、この指に伝わる雫は、ナニ？
零れだす涙――――そんな貴女は、知らない。

――――僕の知らない貴女なんて、僕の望む貴方じゃない……

「止めてくれっ……お願いだから――――」
「哀願なんて――――貴女らしくない」
冷たい光がラフェスの瞳の中に宿る。
酷薄な笑みが、その顔に浮かぶ――――少しも笑っていない瞳は、冴え冴えとすらしていて……
「らしく、ないですよ？　ヴィレット」
感情の色の見えぬ声。無機質な響きすらするその声に、ゾクリと

悪寒が背筋を走る。
「ラ……フェ、ス――――」
伝い落ちる雫。
「彼女と同じ姿で……彼女と同じ声で……彼女と――――違う行動……」
硬質な声は、コツンと床に落ちて転がる。
「ナニ、考えてるんだ……オマエ」
「ねぇ……あの人を汚す行為なんて、許してませんよ？」
にこりと微笑むと、その首に指を廻す。絡まる指は、鋼の様に固くて――――
「止めっ」
「だから……処分しちゃいましょう」
呟く声が消える前に、力の込められた指。あがらう女を力いっぱい絞め付けて――――そして、指の中の存在から鼓動が消えた。
己の下にいる、今まで動いていたものは、ただのガラクタとなりはてて……疲れたように、ラフェスはため息をついた。
（いくら器を用意しようと……貴女と同じ魂は宿る事は無くて――――）
「ヴィレット……」
そっと呟く。大切な、大切な愛しい人……その自由な魂は、留まる事を知らなくて――――僕は、貴女の魂を捜しもとめる。
「――――こんなことなら……その肉体とともに……」
ポツリと呟く。
のろのろと動き出したラフェスは、水槽に近付き、硝子のそれに腕を廻し――――抱きしめるようにして、顔を近づける。
水槽の中では、コポリと泡が上へと上がって行き……赤い水草に絡まって、それを揺らす。細い水草の隙間にその身を通し、上へと昇る泡。
「ヴィレット――――」

愛おしそうに呟く。
――――硝子に阻まれて、抱く事はできないけれど……
静かに扉が開く。

「ヴィレット――――」
愛おしそうに囁く。
――――貴女と繋ぐ糸は、まだ切れないから……
静かに開いた扉から現れる影。

「ヴィレット――――」
「ラフェス……呼んだか？」
振り返ると、呆れたように笑う貴女がいた――――

貴女は、また……ここに来てくれる。
そう、その魂が宿るべき器がここにあるかぎり……。

貴女の肉体なら幾らでも造って差し上げますよ――――ねぇ、ヴィレット。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8695k/

Refrain ～愛しい貴女と過ごす時を夢見て～

2010年10月8日15時50分発行